



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

待降節第2主日 C年(2021年12月5日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：バルク書 5章1—9節

第二朗読：フィリピの信徒への手紙 1章4—6、8—11節

福音朗読：ルカによる福音 3章1—6節

...

三つの朗読から

第一朗読にある背景はバビロン捕囚からの帰還の出来事です。いくつかの言葉が神の姿を表しています。「永遠なる者」(2節)、「命じられた」(7節)、「導かれる」(9節)。永遠なる方は、人々がエルサレムへと戻ってくるために谷を埋め、山を低くするように命じます。こうして人々をエルサレムへと導くのです。そのとき悲しみと不幸は失われ、喜びに満ちるのです。

第二朗読はパウロの祈りに満ちています。それはパウロのフィリピの教会の人々への愛の想いを表しています。「たたえることができるように」(11節)との祈りは、現代のわたしたちに向けられた祈りです。

捕囚となり徒歩で去った民を、神は道を整えて連れ戻していただきました(第一朗読参照)。同じように、キリストの日(第二朗読参照)に備えて、ヨハネによって道がまっすぐにされます。こうしてすべての人が「神の救いを仰ぎ見る」のです(福音朗読参照)。

待降節の黙想 「道あれこれ」

「道」を描いた作品を2点、紹介しましょう。

ひとつは、東山魁夷の『道』という作品です。

この作品は、1950年に青森県の八戸市で描いたと言われています。この作品について、^{かいい}魁夷は、「^{へんれき}遍歴の果てでもあり、また新しく始まる道でもあり、^{ぜつぼう}絶望と^{きぼう}希望を織りまぜてはるかに^{つづ}つづく^{ひとすじ}一筋の道であった——そして遠くの丘の上の空をすこし明るくして、遠くの道がやや右上りに画面の外に消えていくようにすることによって、これから^{あゆ}歩もうとする道という^{かん}感じが^{つよ}強くなった」と^{かた}語っています。



左は、^{きしだりゆうせい}岸田劉生『^{きりどお}切通しの^{しやせい}写生』(道路と土手と塀)。

1915年の作品です。

わずか10日間ぐらいで描き上げたものだそうです。この頃、岸田劉生は古典的な西洋の^{かいが}絵画から^{かいほう}解放されたいと願っていたそうです。「^{ねが}ぢかに自然の^{しつりょう}質量そのものにぶつかつてみたい^{ようきゆう}要求が^{めざ}目覚め」て描いた作品であると岸田は^{かた}語っています。そして「[クラシックな西洋絵画の] ^{とら}捕はれから段々と^{はな}離れたが、^う得るべきものは^え得て^いめた。切通しの写生はこの事を明かに語ると思ふ。その土や草は、どこ^{まで}迄も^{しつかり}と、^{ぢかに}土そのものの^び美に^いふれて^ある。しかしどことなく、古典の

^{かん}感じを^も内容にも^も形式にも持つ。自分はこの画は、今日でも^か可なり好きである。一方その表現法がクラシックの形式にまだ^{しば}縛られて^いゐる^{ところ}処があるのを認めるけれど、あの道のはしの^{かた}方の^{つよ}土の硬く強い感じと、そこから^だわり^は出して^い生へて^ある秋の^{さみ}くすんだ草の^あ淋しい力とは或る^あ処迄よく^あ表現されてあると思ふ」とも^{しる}記しています。

今日の福音に登場する「^{とうじょう}主の^{しゅ}道」に当てはまるのはどちらの道でしょうか？ そして「^{ととの}主の道を^え整えよ」とは^{なが}いったい^などういうことなのでしょう？ 絵を^{なが}眺めながら^あ味わいたいものです。